大東だより帳 (20)

春の序曲 ― 飯盛おろし ―

生駒連峰の飯盛山が夕陽に映えて、枯木立の美しい稜線を見せている。

宵の明星がまたたき始め、凍て空をスバル、オリオンなどがきらめいて渡って行く。

何となく前ぶれの様な風が出はじめたと見る間に、電線を吹き抜ける風が、ビューービューーと虎落笛（もがりぶえ）をとどろかせながら荒れる様子は、さながら春を呼ぶ呪文（じゅもん）である。

「えらい風でしたね」「ほんとにかないませんわ、毎年の事ですけど」立春を過ぎて間もなく、日脚（ひあし）は着実に伸びて、空の明るさはもうだれの目にも早春のある日、突如ゴーゴーと吹き抜ける春一番の何と誇らしげな訪れであろう。

谷田川の流れがさざなみになってきらめいている。

今年もうぐいすがもう庭の山茶花（さざんか）に訪れた。

風の中を冬木立が光をまとい、樹液が幹の中を流れ始めると、細い枝先の木の芽がほんのりと艶めいて来る。

大いなるミステリアスな春のさきがけである。

立春、春一番という言葉に、寒さがやわらぐ思いは、早く春を掲げて、皆で励まし合った昔の人の知恵なのかも知れない。

早春の一日、日本海の強い低気圧に向かって最初に吹き込んで来る南風を春一番という。冬の風、きさらぎの風、春一番等、飯盛山から吹きおろす風に山の名を冠して「飯盛おろし」といわれている。

市内D高校では校歌に「生駒おろしに……」と希望の春を歌っている。

春一番のあと、一日足らずで冬型に戻り、大陸からの北西風が日本列島を吹き抜けて行く。

ふりまかれる黄砂に「なんやのん」と文句を言いつつ一瞬のロマンを見る風の訪れである。

西の空に積乱雲が広がって、横なぐりの雨や砂風の中を雷鳴がとどろく「春はやて」がおそう事もある。

きさらぎの冷たい北西風、暖かい南風、東風、春はやてを繰り返す風のシンフォニーである。

―桜咲くまで七十五日　お茶戸の風も　水取りまで―

暮らしの中のことわざである。

麦ふみ、田おこし、道具の手入れ、桜の時季に始まる苗代作りの手はずなど豊穣（じょう）を願う農家の春用意はもう始っている。

就職、受験、卒業、入学等、春準備は着実に、それぞれの旅立ちの日は近い。

風が呼びあう様な、雪便り、花便りもこもごもに、近くて遠い距離を漠然と見る思いがする。

山すそのぼう洋とした遺跡群の古代の暮らしに、飯盛おろしはじょうじょうと吹いていたのだろうか…。

四条畷の合戦の修羅場に吹いた、正平三年の春一番も、はるかに遠い季節のいとなみである。

永遠でもあり、豊かでもあり、空しい様でもある季節への感慨を、風に見る思いが私には強いのだが…。

見渡すと山際はほのかに明るく、雲が切れて、風が立ちはじめたらしい。

飯盛山のやまなみからすそ野にかけて、壮大な春の序曲がはじまる。

文・川西恵美子

飯盛山からすそ野にかけて吹きおろす「飯盛おろし」春の訪れはもうそこまで…